



芭蕉に思いを馳せながら歩く

伊勢市

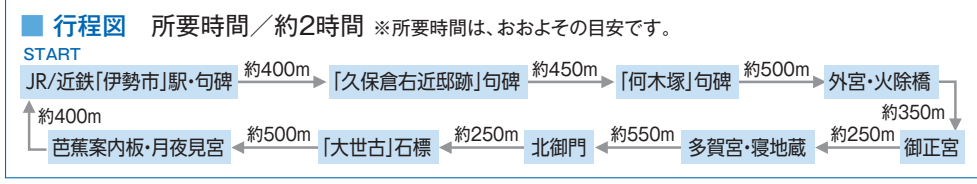
外宮と鳥居前町

松尾芭蕉(1644~1694)は、伊勢にこれがれを持ち、生涯に6度伊勢を訪れたといわれています。そして、そのうちの3度は「野ざらし紀行」貞享元(1684)年、「笈の小文」貞享5(1688)年の旅と、元禄2(1689)年の「奥の細道」で陸奥を巡った後で、それぞれに俳句や紀行文が残されています。

今回は伊勢市駅前を起結点として外宮と外宮の鳥居前町を、芭蕉の句碑やゆかりの場所を訪ね、その伊勢での日々を思いを馳せながら歩きます。いずれも昔、芭蕉も行き来したであろう道。土産物店の続く参道や、外宮神域、古くからある「世古」(細い路地を指す伊勢弁)などバラエティーに富んだ景観が楽しめます。

*文中の俳句・短歌は、句碑に記されている場合はそれに準じ、それ以外は『芭蕉俳句集』『西行全歌集』(ともに岩波書店)に従いました。

取材・文：堀口裕世



「外宮参道」から「何木塚」へ

JR「伊勢市」駅前にある芭蕉の句碑からスタート。ここには「たふとさになおしあひぬ御遷宮」という句が記されています。これは、『奥の細道』の旅を終えた芭蕉が、外宮の御遷宮を奉拝して詠んだ句。お参りする群衆の中で芭蕉が感じた喜びを思いつつ、鳥居をくぐって「外宮参道」へ入ります。土産物店の他、渋いたたずまいの刃物店や木造三階建ての旅館など歴史を感じさせる建物と



JR「伊勢市」駅前にある句碑



外宮参道



「旧山田郵便局電話分室(通信館)」



「何木塚」は明治時代に建立

若者っぽい、ポップな店とが混在する楽しい通りです。ここを抜け、三叉路を左の道へ曲がると、右手は大正時代に建てられた「旧山田郵便局電話分室(通信館(国登録有形文化財・現在はレストランなど)」の白壁と赤い屋根。左手にある「西之世古」の入口には、「久保倉右近

「久保倉右近邸跡」の石碑

邸跡」の文字と「紙ぎぬのぬるともらん雨の花」の句が刻まれた小さな石碑があります。久保倉右近は神宮御師で、路草という号の俳人でもありました。刻まれているのは、路草邸で開かれた句会で芭蕉が詠んだ「紙衣が雨に濡れようとも手折りたい花」に「何があろうとも出たい句会を重ねて表した挨拶的な句。この場所どんな句会が開かれたのだろうかと空想がふくらみます。

そのまま進んで、「伊勢商工会議所」前で右折。直進すると「何木塚」に出ます。



外宮の表参道。杉の大樹が多い



芭蕉も参拝した御正宮



第一別宮の多賀宮



頭を下に横たわる寝地蔵。

ここには、「何の木の花とはしらすにはひかな」という句が刻まれています。芭蕉が常に歌僧・西行(1118~1190)を心に抱いて旅をしたことは有名ですが、この句にも西行作といわれる「何事のおはしますをば知らねどもかたじけなさに涙こぼるる」の歌が投影されているということなのです。ここを出てすぐの交差点を渡った「旧豊宮崎文庫」にも芭蕉の句碑がありますが、公開日以外は閉まっていますので、今回は立ち寄らずに右折。外宮へ向かいます。

多賀宮の前で寝地蔵に会う

外宮の火除橋を渡り、手水舎で手を清めて、表参道へ進みます。この地で芭蕉が詠んだ句は「みそか月なし千とせの杉を抱あらし(『野ざらし紀行』)。詞書きから、これも西行の「深く入て神路の奥を尋ねれば又上もなき峯の松風」という歌を心に持って詠まれていることが分かります。神域にそびえる杉の大樹を見上げ、まずは御正宮にお参り。その後、亀石と呼ばれる石の橋を渡り、98段の石

わいい寝地蔵に別れを告げて石段を下ります。土宮、風宮に参拝し、神楽殿の手前を左へ曲がり北御門から外宮を出ましよう。

芭蕉の滞在した「大世古」へ

県道22号(伊勢南島線)を北御門前の信号で渡って左へ進み、「大世古」の石標を目印に右折します。この辺りは多くの御師の邸宅があった場所。かつて、左手奥には御師で俳人でもあった

「松葉七郎太夫(風瀑)邸」があり、芭蕉はここに10日ほど滞在

していたということなのです。きっと芭蕉もこの辺りを行き来したことでしょう。

右手に続く「伊勢和紙館(大豊



「伊勢和紙館」の入口



「大世古」の石標



二つの句碑が並ぶ

和紙工業株式会社」の塀の前には、「三十日月なし千年の杉を抱く嵐」物の名を先ずとふ蘆の若葉かな」の二つの句碑が並んでいます。

「大世古」を抜けて右に曲がり月夜見宮へ向かいます。この鳥居の向かい側には「伊勢と松尾芭蕉」と

題した案内板があり、伊勢で詠まれた句などが書かれています。

月夜見宮にお参りし、駅に向かつて歩



「伊勢と松尾芭蕉」の案内板

段を上がると第一別宮・多賀宮です。石段を上りきった左、手すりの下に寝地蔵と呼ばれる自然石があります。

『笈の小文』の中に、「(二月)十五日外宮の館にありて」という詞書きとともに「神垣やおもひもかけずねはんぞう」という句があります。釈迦の忌日に神宮で涅槃像を見た驚きを詠んだ句として知られ、涅槃像を外宮のどこで見たのかは謎とされていますが、この寝地蔵を涅槃像に見立てたのではないかという研究者もいます。多賀宮へお参りし、か

き出すとすぐ

に、やはり御師

で俳人であった

「島崎味右衛門(又玄)邸跡」。

今は病院など

になっ

てな

た又玄の妻をねぎら

が妻の咄しせん(俳諧勸進牒)」の句を

詠んだ場所です。このまま

宮参道に出て、出発した句碑の前に戻り、

ゴールです。



外宮別宮の月夜見宮

問 伊勢市役所産業観光部観光振興課
TEL 0596-21-5566